

ガウスの法則とアンペールの法則のノート

名大 太郎

2022 年 12 月 1 日

概 要

ガウスの定理とストークスの定理より、電磁気学のガウスの法則とアンペールの法則の微分形の表式を求める。

1 ガウスの法則

1.1 積分形

体積 V 、表面積 S を持つ領域を考える。この領域内の電荷 Q と表面を貫く電場 \boldsymbol{E} には以下の関係が成り立つ。

$$\oint_S \epsilon_0 \boldsymbol{E} \cdot d\boldsymbol{S} = \int_V \rho_q dV = Q \quad (1)$$

但し、 ϵ_0 は誘電率、 ρ_q は電荷密度である。

1.2 ガウスの定理

任意のベクトル \boldsymbol{A} に対して

$$\int_V \nabla \cdot \boldsymbol{A} dV = \oint_S \boldsymbol{A} \cdot d\boldsymbol{S} \quad (2)$$

が成り立つ。

1.3 微分形

式 (2) を電場 \boldsymbol{E} に適用し、式 (1) と比較すると

$$\nabla \cdot \boldsymbol{E} = \frac{\rho_q}{\epsilon_0} \quad (3)$$

となり、電荷保存の式 (ガウスの法則) の微分形が求まる。

2 アンペールの法則

2.1 積分型

無限に長い直線導線に電流 I を流すと、その周りには図 1 のような磁場 B ができる。その強さは導線からの距離を r として

$$B = \frac{\mu_0 I}{2\pi r}$$

となる。ここで μ_0 は透磁率である。より一般的に、断面積 S を持つ閉曲

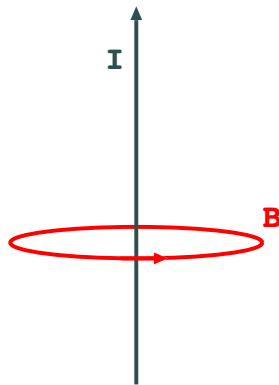


図 1: 直線電流 I の周りの磁場 B .

線 C を考えると

$$\frac{1}{\mu_0} \oint_C \mathbf{B} \cdot d\mathbf{l} = \int \mathbf{j} \cdot d\mathbf{S} = I \quad (4)$$

となる。ここで、 \mathbf{j} は電流密度である。

2.2 ストークスの定理

任意のベクトル \mathbf{A} に対して

$$\int_S \nabla \times \mathbf{A} \cdot d\mathbf{S} = \oint_C \mathbf{A} \cdot d\mathbf{l} \quad (5)$$

が成立する。

2.3 微分形

ストークスの定理、式 (5) を磁場 \mathbf{B} に適用し、式 (4) と比較すると

$$\nabla \times \mathbf{B} = \mu_0 \mathbf{j} \quad (6)$$

が得られる。

3 結論

ガウスの法則とアンペールの法則の微分形の表式を求めた。

$$\nabla \cdot \boldsymbol{E} = \frac{\rho_q}{\epsilon_0} \quad (7)$$

$$\nabla \times \boldsymbol{B} = \mu_0 \boldsymbol{j} \quad (8)$$

謝辞

本稿の執筆にあたり、文献 [1] を参考にした。また、文書の作成には L^AT_EX を用いた。

参考文献

- [1] Feynman, R. P., Leighton, R. B., & Sands, M. L., 1965, The Feynman Lectures on Physics, vol.III (ファインマン 物理学 III 電磁気学), Addison-Wesley